

**[B年] 終末前主日(2023年11月19日)**

**【旧約聖書日課】 出エジプト記 2章1～10節**

1レビの家の出のある男が同じレビ人の娘を  
めとった。<sup>2</sup>彼女は身ごもり、男の子を産んだが、  
その子がかわいかったのを見て、三か月の間隠  
しておいた。<sup>3</sup>しかし、もはや隠しきれなくなっ  
たので、パピルスの籠を用意し、アスファルト  
とピッチで防水し、その中に男の子を入れ、ナ  
イル河畔の葦の茂みの間に置いた。

4その子の姉が遠くに立って、どうなることか  
と様子を見てみると、<sup>5</sup>そこへ、ファラオの王女  
が水浴びをしようと川に下りて来た。その間侍  
女たちは川岸を行き来していた。王女は、葦の  
茂みの間に籠を見つけたので、仕え女をやって  
取って来させた。<sup>6</sup>開けてみると赤ん坊がおり、  
しかも男の子で、泣いていた。王女はふびんに  
思い、「これは、きっと、ヘブライ人の子です」  
と言った。<sup>7</sup>そのとき、その子の姉がファラオの  
王女に申し出た。「この子に乳を飲ませるヘブ  
ライ人の乳母を呼んで参りましょうか。」

8「そうしておくれ」と、王女が頼んだので、  
娘は早速その子の母を連れて来た。<sup>9</sup>王女が、「こ  
の子を連れて行って、わたしに代わって乳を飲  
ませておやり。手当てはわたしが出しますから」  
と言ったので、母親はその子を引き取って乳を  
飲ませ、<sup>10</sup>その子が大きくなると、王女のもとへ  
連れて行った。その子はこうして、王女の子と  
なった。王女は彼をモーセと名付けて言った。  
「水の中からわたしが引き上げた(マーシャ-)  
のですから。」

**【使徒書日課】 ヘブライ人への手紙 3章1～6節**

1だから、天の召しにあずかっている聖なる兄  
弟たち、わたしたちが公に言い表している使者  
であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。  
<sup>2</sup>モーセが神の家全体の中で忠実であったよ  
うに、イエスは、御自身を立てた方に忠実であ

られました。<sup>3</sup>家を建てる人が家そのものよりも  
尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄  
光を受けるにふさわしい者とされました。<sup>4</sup>どん  
な家でもだれかが造るわけです。万物を造られ  
たのは神なのです。<sup>5</sup>さて、モーセは将来語られ  
るはずのことを証しするために、仕える者とし  
て神の家全体の中で忠実でしたが、<sup>6</sup>キリストは  
御子として神の家を忠実に治められるのです。  
もし確信と希望に満ちた誇りを持ち続けるな  
らば、わたしたちこそ神の家なのです。

**【福音書日課】 ヨハネによる福音書 6章27～35節**

<sup>27</sup>朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもな  
くならないで、永遠の命に至る食べ物のために  
働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに  
与える食べ物である。父である神が、人の子を  
認証されたからである。<sup>28</sup>そこで彼らが、「神  
の業を行うためには、何をしたらよいでしょう  
か」と言うと、<sup>29</sup>イエスは答えて言われた。「神  
がお遣わしになった者を信じること、それが神  
の業である。」<sup>30</sup>そこで、彼らは言った。「それ  
では、わたしたちが見てあなたを信じることが  
できるように、どんなしるしを行ってください  
ますか。どのようなことをしてくださいますか。  
<sup>31</sup>わたしたちの先祖は、荒野野でマナを食べ  
ました。『天からのパンを彼らに与えて食べさ  
せた』と書いてあるとおりです。」<sup>32</sup>すると、イ  
エスは言われた。「はっきり言うておく。モー  
セが天からのパンをあなたがたに与えたのでは  
なく、わたしの父が天からのまことのパンをお  
与えになる。<sup>33</sup>神のパンは、天から降って来て、  
世に命を与えるものである。」<sup>34</sup>そこで、彼らが、  
「主よ、そのパンをいつもわたしたちにくださ  
い」と言うと、<sup>35</sup>イエスは言われた。「わたしが  
命のパンである。わたしのもとに来る者は決して  
飢えることがなく、わたしを信じる者は決して  
渴くことがない。」

## 「聖書協会共同訳」(2018年版)読み比べ

## 出エジプト記2章1～10節

<sup>1</sup>レビの家のある男が、レビ人の娘をめとった。  
<sup>2</sup>女は身ごもり、男の子を産んだ。その子を見ると、愛らしかったので、三か月間隠しておいた。  
<sup>3</sup>しかし、もはやその子を隠しきれなくなったので、その子のためにパピルス（紙の原料）の籠を用意し、アスファルトと樹脂で防水し、その中に赤子を寝かせて入ナイル（ナイル川）のほとりの水草の茂みに置いた。  
<sup>4</sup>その子の姉が遠くから、その子の身に何が起るかうかがっていると、<sup>5</sup>ファラオの娘が下りて来て、川で水浴びを始めた。侍女たちは川の岸を歩いていた。ファラオの娘が水草の茂みでその籠を見つけ、女奴隷をやって取って来させた。<sup>6</sup>開けてみると、赤子がいた。それは男の子で、泣いていた。彼女は不憫に思って、「この子はヘブライ人の子です」と言った。<sup>7</sup>その時、その子の姉がファラオの娘に申し出た。「私が行って、あなたのために、この子に乳を飲ませる乳母をヘブライ人の中から呼んで参りましょうか。」<sup>8</sup>するとファラオの娘は、「行って来なさい」と言った。そこで、少女は行って、その赤子の母親を呼んで来た。<sup>9</sup>ファラオの娘は彼女に言った。「この赤子を連れて行って、私のために乳を飲ませなさい。私が手当てを払います。」そこで、母親は赤子を引き取り、乳を飲ませた。  
<sup>10</sup>その子が大きくなると、母親はファラオの娘のところ（ファラオの宮）に連れて行った。その子はファラオの娘の息子となった。ファラオの娘はその子の名をモーセと名付けて、「私が彼を水から引き出したからです」と言った。

## ヘブライ人への手紙3章1～6節

<sup>1</sup>だから、天の召しにあずかっている聖なるきょうだいたち、私たちが告白している使徒であり、大祭司であるイエスのことを考えなさい。  
<sup>2</sup>モーセが神の家全体にわたり忠実であったよ

うに、イエスは、ご自分を任命した方に忠実であられました。<sup>3</sup>家を建てた者が家そのものよりも尊ばれるように、イエスはモーセより大きな栄光を受けるにふさわしい者とされました。<sup>4</sup>どんな家でも誰かが建てるものですが、万物を建てられたのは神なのです。<sup>5</sup>モーセは後に語られることを証しするため、仕える者として神の家全体にわたり忠実でした。<sup>6</sup>しかし、キリストは御子として神の家を忠実に治められます。もし確信と希望に満ちた誇りとを持ち続けるなら、私たちこそ神の家なのです。

## ヨハネによる福音書6章27～35節

<sup>27</sup>朽ちる食べ物のためではなく、いつまでもとどまって永遠の命に至る食べ物のために働きなさい。これこそ、人の子があなたがたに与える食べ物である。父なる神が、人の子を認証されたからである。<sup>28</sup>そこで彼らが、「神の業を行うためには、何をしたらよいでしょうか」と言うと、<sup>29</sup>イエスは答えて言われた。「神がお遣わしになった者を信じること、それが神の業である。」<sup>30</sup>彼らは言った。「それでは、私たちが見てあなたを信じるができるように、どんなしるしを行ってくださいますか。どのようなことをしてくださいますか。」<sup>31</sup>私たちの先祖は、荒野でマナを食べました。『天からのパンを彼らに与えて食べさせた』と書いてあるとおりです。<sup>32</sup>すると、イエスは言われた。「よくよく言うておく。モーセが天からのパンをあなたがたに与えたのではない。私の父が天からのまことのパンをお与えになる。<sup>33</sup>神のパンは、天から降って来て、世に命を与えるものである。」

<sup>34</sup>そこで、彼らが、「主よ、そのパンをいつも私たちにください」と言うと、<sup>35</sup>イエスは言われた。「私が命のパンである。私のもとに来る者は決して飢えることがなく、私を信じる者は決して渴くことがない。」

**黙想のためのノート****次主日の教会暦と聖書日課**

・11月19日「降誕前第6主日」の日課主題は「救いの約束(モーセ)」。この日は伝統的な教会暦では「終末前主日」。

・旧約聖書日課は、「出エジプト記」から、「モーセ誕生譚」の箇所。使徒書日課は、「ヘブライ人への手紙」から、主イエスをモーセとの比較で称賛する箇所。福音書日課は、「ヨハネによる福音書」から、パンの出来事を受けて「命のパン」について教える箇所。

**旧約日課(出エジプト2章より)**

・「出エジプト記」は、ユダヤ正典(ヘブライ語聖書)「律法(トーラー)」の第二巻、「申命記」まで続く「モーセ物語」を構成する第一巻。「モーセ誕生譚」から始めて、「モーセ召命譚」、「ファラオとの交渉物語」、「過越の出来事とエジプトからの脱出」、「荒れ野の逸話」と続き、「シナイ契約の出来事」と「幕屋建設の指示と実施」を物語って、「民数記」に続く。日課箇所は、「モーセ誕生譚」の中でも、モーセが誕生してエジプトの王女のもとで育てられるようになるまでが物語られている。

・「誕生譚」は、モーセ誕生の前に、ファラオによる「ヘブライ人」に対する迫害を描いている(1章)。そこでは、ファラオがヘブライ人に対して過重な労働を課していたことと共に、ヘブライ人の男児殺害命令にまつわる助産婦らの逸話が置かれている。日課箇所の冒頭は、これらの背景を踏まえた逸話として展開している。ただし、このような出来事が、実際にあったのか、あったとしていつの時代のことなのか、などは全く分からない。「ヘブライ人(ヒブル<イブリー)」は、古代エジプト語の碑文で「アビル/ハビル」と呼ばれている人々と同一視されているが、確証はない。旧約聖書中、「ヘブライ人(イブリー)」の用例は「出エジプト記」に14例と集中しており、「律法」中では「創世記」に6例と「申命記」に1例、他は、「サムエル記上」の「サウル王のベリシテ戦役物語」中に8例、「歴代誌上」に1例、「エレミヤ書」に1例、「ヨナ書」に1例で、用例には偏りがある。その中で、日課箇所を含む「誕生譚」には7例が含まれ、「ヘブライ人伝承」のようなものが存在したことをうかがわせる。

・「誕生譚」によると、モーセは「レビ人」の出自であり、このことは、「出エジプト記」6章で述べられる「アロンとモーセの系図」でも確かめられている。「レビ人」は、「創世記」の族長物語で描かれる「ヤコブ=イスラエル」の12人の息子の一人、第三子の「レビ」を祖とする部族として扱われているが、「モーセ物語」から展開する「イスラエル正史物語」中では、必ずしも部族長を擁した一個の部族集団として描かれるわけではない。「律法」や「ヨシュア記」がカナン定住に際しての各部族の嗣業地(割り当ての領地)として規定する中では、「レビ人」は嗣業地を割り当てられず、各部族の中に

散在して居住する人々とされている。また、「レビ人」は「祭司」の母集団とみなされており、実際には、各地の聖所を拠点として宗教的営為を担った社会集団を指していると考えられる。旧約聖書中で実体としての「レビ人」を描いているのは、ほとんどが南王国(ユダ王国)に関連する記事においてである。

・10節は「モーセ」の命名譚となっているが、この語源的説明はヘブライ語に基づいており、エジプトの王女による命名という設定と矛盾する。現代の通説では、「モーセ」の名は古代エジプト語で「生む/子」を意味する「ムス/ムシ」に由来すると考えられている。この語は、エジプトの王名にしばしば含まれるなど、エジプト名で多用されている。

**使徒書日課(ヘブライ3書)**

・「ヘブライ人への手紙」は、新約正典中、いわゆる「パウロ書簡集」と「公同書簡集」の間に置かれた書簡文書。末尾の体裁から書簡形式で作成されたと推認されるが、冒頭に置かれるべき書簡定式(差出人と宛名、挨拶文)が欠落した形で正典に置かれている。初期キリスト教会では、パウロ書簡など多くの文書が教会間で回覧されていたことが知られており、その際に、宛名部分を差し替えるなどの処置が施されていた可能性があるが、それによって欠落したのかもしれない。あるいは、元来の差出人名と宛名を取って外すことで、広く一般的な教えとして教会間で共有しようと意図されたのかもしれない。本書は、東方正教会では「パウロ書簡集」の中に教えられている。

・本書簡は、旧約正典「律法」をひな形としてキリストの意義を解釈することに特徴がある。全体として、「大祭司」をひな形とした「大祭司キリスト論」が展開されるが、具体的には、3~4章で「モーセ」、5~7章で「メルキゼデク」が取り上げられ、その後は「律法」の規定に基づくアロンの「大祭司」職が取り上げられる。日課箇所は、「モーセ」を典拠として「大祭司キリスト論」を展開する最初の部分。

・「神の家」(2節、5節、6節。オイコス・トゥ・テウ)は、共観福音書(マタイ12:4および並行箇所)では「神殿」を指して用いられる用語であるが、これは、旧約で「神殿」を意味する表現に準じている。他方、初期教会はこの用語を自分たち信仰者の群れを指す用語として用いるようになったと考えられ(1テモ3:15、1ペト4:17)、日課箇所は、その用法を援用している。

・3節、5節で「忠実」と訳されているギリシア語「ピステス」は、「信仰」と訳される「ピステイス」の形容詞形。本書簡で、「ピステイス(信仰)」は、10~11章を中心に多用される重要な鍵語で、一般には「信頼」「真実」「誠実」「忠実」などと訳される。類語に「信心」と訳される「エウセベイア」がある。「エウセベイア」の語義は「よき畏敬」であり、敬虔な態度を意味しているが、「ピステイス」は、一方の者の態度というよりは、相手との関係性に着目した語。

**福音書日課(ヨハネ 6 章より)**

・日課箇所は、6 章冒頭に置かれた「パンの出来事(五千人の食事)」の逸話から展開して、従ってきた人々との対話の中で「命のパン」としてのご自身を主イエスが提示する箇所。「パンの出来事」は、四福音書が共通して伝える逸話で、細部の違いはあっても、基本的な構成にほとんど異同が見られず、使徒たちの初代教会を基礎づける共通の逸話伝承になっていたと考えられる。この逸話伝承について、各福音書は、その意味を主イエスが弟子たちに教える場面を加えており、出来事をどのように解釈すべきかという点で、使徒間、教会間で異論があったと推認される。

・「マタイ」および「マルコ」は、この出来事を「五千人の食事」と「四千人の食事」と二重に伝え、それぞれの出来事で最後に残ったパン屑の籠の数を象徴的に理解するように教えている(マタイ 16:9~10、マルコ 8:19~20)。「ルカ」は、直接的な解釈を提示しないが、多用する「食事の出来事」においてその意義を解釈してみせようと考えられる。それに対して「ヨハネ」は、「主イエスを命のパンとして受けること」として、パンの出来事を解釈してみせている。この解釈は、日課箇所に続く箇所では、「聖餐(主の晩餐)」における「パン」の意義と結びつけられて展開されている。

・日課箇所では、主イエスがご自身を「命のパン」として提示するにあたって、「モーセ物語」にある「天からのパン」としての「マンナ」が予型として取り上げられている。「ヨハネ福音書」は、全体として、主イエスと人々(ユダヤ人)との関係を、「モーセ物語」で描かれるモーセとイスラエルの民との関係に擬して描いており、「パンの出来事」も、元来は、「モーセのマンナの出来事」に沿って解釈されていたものと考えられる。つまり、「父(である神)が天からのまことのパンをお与えになる」(32 節)ということにおいて、主イエスがモーセに代わる存在になるということ、を、「パンの出来事」が指し示すこととして提示することが、出発点だったのであろう。他方で、主イエスを「父の子」として「天から遣わされた者」とする理解が「ヨハネ福音書」には一貫してあり、これによって二次的に、「天からのパン」=「イエス」という図式が成立したと考えられる。そこで、後に続く「聖餐」理解(を示唆する箇所)でも、元来は「過越の食事」における象徴的物素に過ぎない「パン」が、「イエス」その人と同一視されるものとして解釈されている。

**来週の誕生日 (11 月 19 日~25 日)****主日礼拝の讃美歌から**

・21-224 番「われらの神、くすしき主よ」(= I-73 番「くすしきかみ、たえなる主よ」)は、17 世紀ドイツ改革派牧師で敬虔派の影響を受けて讃美歌創作をした J.ネアンダーの作詞。曲は、この歌詞を自身の歌集で発表する際にネアンダー自身が指定して掲載した曲(作曲者不詳。ネアンダーの自作?)。

・21-419 番「さあ、共に生きよう」は、ドイツで毎年行われている全国信徒大会 1983 年大会のために編纂された讃美歌集『いのちに立ち返ろう』から採用された讃美歌。

・21-563 番「ここに私はいます」は、讃美歌創作運動の第一人者ブライアン・レンの作詞。スコットランドの社会福祉施設の委嘱によりクリスマス礼拝のために作詞。作曲のダニエル・C・デーモンは米国メソジスト派牧師で、ジャズ・ピアニストとしても活動中。

**21-224「われらの神、くすしき主よ」****Wunderbarer König**

1. Wunderbarer König, Herrscher von uns allen, / laß dir unser Lob gefallen; / Deines Vaters Güte hast du lassen triefen, / ob wir schon von dir wegiefen: / Hilf uns noch, / stärk uns doch; / laß die Zungen singen / laß die Stimmen klingen.
2. Himmel, lobe prächtig deines Schöpfers Thaten, / mehr als aller Menschen Staaten. / Großes Licht der Sonne, schieße deine Strahlen, / die das große Rund bemalen; / lobet gern, / Mond und Stern, / seid bereit zu ehren / einen solchen Herren!
3. O du meine Seele, singe fröhlich, singe! / singe deine Glaubenslieder; / was den odem holet, jauchze, preise, klinge; / wirf dich in den Staub darnieder! / Er ist Gott / Zebaoth! / Er nur ist zu loben, / Hier und ewig droben.
4. Hallelujah bringe, wer den Herren kennet, / wer den Herren Jesum liebet; / Hallelujah singe, welcher Christum nennet, / sich von Herzen ihm ergiebet. / O wohl dir! / glaube mir: / endlich wirst du droben / ohne Sünd ihn loben!

**21-419「さあ、共に生きよう」****Damit aus Fremden Freunde werden**

1. Damit aus Fremden Freunde werden, / kommst du als Mensch in unsre Zeit: / Du gehst den Weg durch Leid und Armut, / damit die Botschaft uns erreicht.
2. Damit aus Fremden Freunde werden, / gehst du als Bruder durch das Land, / begegnest uns in allen Rassen / und machst die Menschlichkeit bekannt.
3. Damit aus Fremden Freunde werden, / lebst du die Liebe bis zum Tod. / Du zeigst den neuen Weg des Friedens, / das sei uns Auftrag und Gebot.
4. Damit aus Fremden Freunde werden, / schenkst du uns Lebensglück und Brot: / Du willst damit den Menschen helfen, / retten aus aller Hungersnot.
5. Damit aus Fremden Freunde werden, / vertraust du uns die Schöpfung an; / Du formst den Menschen dir zum Bilde, / mit dir er sie bewahren kann.
6. Damit aus Fremden Freunde werden, / gibst du uns deinen Heiligen Geist, / der, trotz der vielen Völker Grenzen, / den Weg zur Einigkeit uns weist.

**21-563「ここに私はいます」****Here Am I**

1. Here am I, / where underneath the bridges / of our winter cities / homeless people sleep. / Here am I, / where in decaying houses / little children shiver, / crying at the cold. / Where are you?
2. Here am I, / with people in the line-up, / anxious for a handout, / aching for a job. / Here am I, / where pensioners and strikers / sing and march together, / wanting something new. / Where are you?
3. Here am I, / where two or three are gathered, / ready to be altered, / sharing wine and bread. / Here am I, / where those who hear the preaching / change their way of living, / find the way to life. / Where are you?